



門口 3743
巻 7

昭和十六年一月十一日
尾野貴美氏贈

小原町に依り居る市常たつと云者夫婦とも老父母に
事へ多孝を盡せり老父は是たつと云るが年老老母は中
風を病ても是叶へど久き母の病中に夫婦とも一應
ことろふくを尽して看病し多病をどおふふふ
合餅も餅を食ひてとらあり母病を是不叶
ふ二役の不潔つわい他人よんせと云う仕へんが云々
のをたしくめぬと云夫婦の歎き悲しむ限りはは老母
といひかく夫婦とも心を合せて老母を養へたぐ
ひ稀なりと人皆感ふに寛保二年の春 保國公と云
石夫婦も米給つて貴美に給ふ

九 小原町孫之希

小原町光清三信家より孫之希とある者お貞一と
いふと老母に孝を盡し終り寛保三年二月のふこ
米一石賜り其孝を賞し終り寛保三年二月のふこ

十 紙屋町与十希

紙屋町光田屋与十希とある者十八歳祖母七十歳母と
十五歳あり幼く才妹ありお族多々お極めて貞一と
老祖母と母に孝を盡し益々野菜物ふと賣て
金二町内火代處へ代ふ所の賃金を立て出る屋敷を
どてよく働さるの暇もふくまじと祖母と母に孝を

礼義正しく終る祖母と母れを肖うと才妹も睦しく
一家甚和順し其人の如く貞一とある者ふくまじと
養の宝曆七年六月 壽國云 保國云 圓石白銀賜ひ賞とせ
ぬいぬ

十一 日町文七希

日町葉屋文七希老母へ孝行あるゆきとある市令より其
孝徳を賞せり

十二 上内田町又八希

上内田町金川屋又八希父六孫次希とあり又八希お貞
おとある元よりお貞おたるが老父二十年おより申風と



又年若よりちた右れも足も叶いざりしうばを病もも枕に臥
てわり又糸より仕候又とるども二之度で夫婦も起て
安否候も夫婦も抱起し候もいふと退屈しうふ
と慰めさましく候も一う寝起しう付身痛しふとい
ば夫婦をを愛してとも痛うがごとく面よりわくまを
身はまよりいふ言ふとふりぬち酒をこのとある人
之度で看候し候もいふと母妻もふれ族長しと
いふも物々乃食物も甚かきとていふもこのにふるや
考てもいふといふ妻の病起候中の活き物どもい
ふわいふと十一年のる持病など候しとていふは

とてつゝいそぎに終る人のみけど若芳のこゝもわ
 らずおまの食ひも妻くめて喰ひぬおく老父職ふつた
 高倉とてまゝ置て又希いあるに食うるを店とてどもうら
 とてきり来りて背ふとこより妻は折角好物ふと須へ一
 とて中へいそぎて派をなげ例をそとて孫女切なりしかども
 他のおもてあつらひ菓子ふどりらひをいそぎておくり祖
 父いとら高自らの食ひと孫女と父母の孝行をえおひ
 ろや祖父母にもよく事へく世の雅さまたとい異なり
 父母の意にえよりなごども又希お業よくはとら人
 も篤愛ありしふん人感へあつた宝曆八年九月十二日

壽園云れ徳一連一主婦は食米五石賜て其に孝を賞
 賜へ給ふ

十三 下の町徳次希

下の町川が屋徳次希は孝をたつとつて継母と分勇
 お族に人あり老父より衣服は裁縫をお業とてあるおつて
 負へとて老父継母と徳次希よくは久彼をいそぎ
 して食ひふと成とてむろ酒を好むとては益疾あな
 酒を温めとら御し父母の意にほいどとては牙
 母のせし子あり徳次希は継母とてども実母より親篤
 く事へたり分は放蕩若に母大に公方へるは兄をいそぎ

自らい妻をも娶らばて分れ孝終に改らるる分は妻
 をむくも其妻不幸に命に今を離縁せりうと
 終母安んぬいふ分が公持改とせんがたうな妻と味
 せありやうや分も年々する兄の篤実にて父母を孝終
 を感もあるあやうふく終終に中改るる父既う年老
 あまば家業も怠りぐらあまば徳次希い初起し疾すと
 終成出し懈らば父母と分いに時よ應せし衣服をととの
 忌せも怠りも兄の奴僕にぐくもく無服少あ年始又言
 うるも家業をいど父母の孝分一の眩と感受せざる
 者ふし
 壽國云國石米五苞と賜りて其孝悌と賞し

あまう

十四 廣瀬町清都

廣瀬町に住る清都とある座敷に又七希とて八十に歳
 めり老妻れあふまば清都二弦の少しえううろ病に老父
 とあまううろ孝終を盡せりおえうろ負しあまばうろ
 とあまううろ父はくあ孝と盡せざる篤く其父盲人
 めも起り夜食ふととんば用いて盡夜病に志切り
 清都妻に老父はるうと涙く教厚く示と妻にまの
 孝徳に感し老父を旁り家族に眩し盲目の父にて孝ま
 めどい涙りし世人善く聞ゆて感とるに堪ど室曆ハ

多岐冬 壽國公に徳を連し白狼を下し給り獲賞せし
世に及ぶ府より狼二百目清都が領所以下まで清都が
家の保級向後其不として捕ふべし市令より命に及ぶと也

十五 高橋町安右の妻吉子七太の

高橋町安右の妻吉子七太の
門とる者を獲保乃中より吉子七太の妻吉子七太の
を獲し給る方ふくぬ實の子とて其掃める志を
七太の母にせしめし眼病に及目とありて父母年あいて
給り家を買ひく世を送りしものありとて母七
太の母にせしめし眼病に及目とありて父母年あいて

家業をせしめし母も貧窮ありて其子よりしを
し高橋町安右の妻吉子七太の妻吉子七太の
を獲し給る方ふくぬ實の子とて其掃める志を
七太の母にせしめし眼病に及目とありて父母年あいて

十六 上出石町修玄清

上出石町修玄清
ある若老母に侍るもの
ある若老母に侍るもの
ある若老母に侍るもの

十七 富田町七十郎英妹くふふと



富田町に侍る長十郎とある者父を長五郎とあり桶屋
 を業とせり長十郎と廿八歳妹くは廿二歳ふと十八歳
 あり兄弟三人は父母は侍り篤く母は継母ふと母
 実の母より尚懇くは父を継母より継母より病
 づらむ若むるに父のむ切ありし或は継母湯に浴
 する湯殿に給うがゆゑに父は病に罹りて
 病に倒れ伏し居るに父を病に罹りて
 さまぐは醫者を事し昼夜の看病頻稀ありあり
 を隣を唱へる感ぜざるあり
 保國云其孝の篤
 りを國に宝曆十二年を市中にぐせ給ふ次は彼が



の賃をえ老母の衣服より始初乃食物に公成盡く有り是
 有り前々子蟹とて此より其家風を悉く自就と老母
 の不孝にもあへんと離縁し多々娘もや居くぬ此迄
 不徳目に他の家へ雇ひ置初毎に宿成出たり終日の食
 ふとかぎを娘にようく云合せて言前にも娘にう
 せり母の親を見娘に其日女を同り老母の食量
 かゝれた時平日好し小魚など個々あるものあり
 不ふく毎々老母は洗ふも娘に公成とて何せど
 小徳ぶく女抱して何々洗ひ圍いつたも入る
 中其例より居くは方ふれおき物よりふじて心を

慰めたり去来をより老母は痛くて終歩かふらふと云ふ
他人の産に終ど老母の例をまじてより終に成くづては
へり姫をこがふれども電くもく便りある女の身か
とども其孝心お十一年あつてける知るもの他人國の
隣と賞せざるいふに終りてさうられり 表よりさうて白
根終り賞をさうするの篤く

二十 横町門に希妻

横町後屋門に希夫婦と老母よりく事て数年あ
ど門に希より児郎郡那村の祠官難波掃部が分て
希子とありの妻と老母れ女よあ又妻の妹とわうり門

に希より希子よ来らるじうらへ上之町の商家に十
六年はへり篤く其老にまよりやうに務めい希子に
終り後其老に日庸み終り妻に留る人衣振と
洗ひ縫物ふじてわき賃をえあどもとくき家業
ふまおらるい真く老母六年あより中風成れいあま
妻をい老母のかたりに離れぬを慰めりて終りは病に
りるもいおきて目との吐くふじてぬをいせりる
く老母希子を好くまば門に希日毎よりくして久
すくもよりぬあふも推しめり病の念に調て母れ歎
へるをたのしとくいより賓客成終りるあども

其後懐^{まへ}正^{ただ}しく敬^{うやま}ひ篤^{あつく}く老母^{らうぼ}を慕^{たづな}はれりて必^{かならず}あまの主婦^{しゅふ}一入^{いっにゅう}
又^{また}芳^{ほう}うあ俊^{しゅん}の様^{よう}も心^{こころ}付^つ衣^え就^{しゅう}臥^ふをふんとい^い真^{まこと}くき^きをい^いて
私^{わたくし}おやどのよれ物を忠^{ちゅう}せ主婦^{しゅふ}いさそあり門^{かど}に帝^{てい}かく孝^{こう}を
一^{いつ}朋友^{とも}友^{とも}にも亦^{また}ううと一^{いつ}種^{しゅ}よ其^{その}うまの人の勿^{なほ}論^{ろん}を
町^{まち}くれ人も感^{かん}腹^{ふく}せどとふふい^いゆ和^わふふの其^{その}表^{ひょう}云^い答^{こた}
篤^{あつく}く賞^{しょう}をわけて主婦^{しゅふ}一^{いつ}米^{こめ}を芭^ばを賜^{たまひ}ふぬ

君に徳を連し、倉米一石を乞ふ其孝行を感ず

廿四 同町新町の妻

同町新町の妻七十二歳、夫新町の八十歳、九年己未、
より歩行せしむるに、老を免れしものあり、よく負其
妻老を連し、連者よく其一人の衣を洗ひ、糞を
糞に秋より冬まで、ありて、安念の庭に、まき、糞米の味あり
あま、糞をいれ、糞を去り、糞をいれ、むるのを、はらて、糞米を
て、助力とて、ゆりて、老父の看病、心を盡し、とらに、徳を
まき、老父に、味をたれ、物を飽せ、已む、飢を、み、と、本
より、老父が、寒暑の、服、は、み、り、わ、り、み、る、老女あり、と、説、き

わ、り、み、る、感、と、君、に、國、に、是、を、称、さ、し、白、銀、を、給、ふ

廿五 大黒町治を清

大黒町、児、治、治、希、八、分、治、を、清、老、母、妹、と、し、ま、其、族、に、人、あり
が、兄、を、病、死、し、あ、妻、を、ふ、し、母、を、扶、け、し、く、あ、め、を、し、ま、る、に、妹
を、理、れ、し、あ、親、を、養、育、せ、り、治、を、清、一、人、を、用、を、計、り、業、を、営
む、り、より、家、を、ふ、し、ま、り、次、子、に、ま、り、く、あ、め、を、し、ま、る、母、兄、妹、を、
抱、き、し、に、あ、妻、を、一、日、に、食、食、個、一、通、二、人、の、腹、を、養、育、物、を、
と、り、計、い、母、の、看、病、の、次、に、兄、妹、に、ま、り、や、ふ、ふ、と、用、を、
る、幸、に、け、て、計、る、べ、く、人、を、を、唱、人、を、称、し、ま、る、
君、に、し、國、に、一、石、の、倉、米、賜、り、て、孝、行、を、称、さ、し、給、ふ

廿六 濃尾町市太夫

濃尾町市太夫は、市太夫のついでに市太夫の娘中
船尾のけしきありしが、知さるる市太夫をけうらひに撥ふら
せり。小代の子といふ、あつても、油でせど、市太夫の
小魚ふと、商ひぬ、お梅は、市太夫の母に事へて、老
年いまだ、足さず、物く、敏く、篤実、人となり
信あり、魚の糠綿、実や、れ、物賣、一夜、父母の事、い
は、私のもう、門を出て、父母の例、ゆりて、世に、物結ふ、じ
お、お、ぐ、さ、酒を、この、さ、目、い、か、マ、求、さ、り、て
希、め、は、ち、ら、う、め、を、と、り、て、を、と、い、む、父母、国、に、さ、



秋を以てきせ福を以てきせけりてくくくく其の國を
りてあふと涼くくくく又父母用を以てくくく其の
と終るは年々の若みいとくくく其の父母のくくく
事実子よるくくく和八年乃二月 君これ徳くくく白狼
賜り孝徳を賞くくくを給ひぬ

廿七 大工所佐玄清其妻

大工所山田屋佐玄清其母のわくくく其の母佐玄清元兒其母の
山田の若みくくく其の妻は後くくく其の母くくく其の母
くくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
中いある商家に十二年はくくくやうくくく其の母くくく其の母

其の日用にくくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
日産みくくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
酒を去るくくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
其の物語くくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
病を以てくくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
疾の看病くくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
のくくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母
くくく其の母くくく其の母くくく其の母くくく其の母

枕邊に於て機嫌を伺ひ病後酒もこのまゝに夕ぐに
 菓子に酒を調へ神に香をともむ母も日くれ去る
 みるのを氣毒うて辞さるるに誰人うのひつる
 とも其の心ふくまありき方へ人か産まじとて
 人か具うれとてふれ謝をのぞり依き清修を
 一掃の人にも親まとなるゑのそ大兄の用を
 一所くみぬ不承なるい若人ゆき清と其
 去清の隣家にうぬ依き清出入る毎うち
 義篤く挨拶をのぞりぬ妻は夜中夜茶を
 休むて源切めり母なり人な張るい依き清
 夫婦が孝と盡

てり佛社の加護あると曉の寝ざりしを
 ぬに涙をふぐぬそと人なをうりぬ
 若云委しく國石依き清み金米一石妻に
 奉したる

廿八 中々町古き清女庵

るんち中の町古き清といふ若の女あり
 もあれたのかきば老父八十餘とも疾
 とも益小細いゝゝゝ骨折多きも
 孫ふとわけて負く庵に國士内田氏の
 勅方も宜しくいん俸銀も自らの
 りのりよ用ひと老父み



官の奴とありて宝曆十年の秋江戸よりて欠落せり七玄清
又友奴とありて明和元年の比江戸よりて欠落せり七玄清
りし七玄清が妻と云々いまと叔と老母の喪をうけたる妻は
と歎と老母の終身乃憂不孝の罪たと云ふ云々云々
世めて已に身と粉よとて死に姑りよく仕へて天年を終
んとつりおぼれて貧しき一合の終るべきにわが妹
は毛綿を織草をうとる漸く姑が喜ひを及んうとる孝
と云々いぬ孝婦容色ありき再嫁とせんといふと人とのとめけ
るいしと云々いぬと又おぼれ入まを入んを人の謀多きと孝婦の
云々いぬと云々いぬと又おぼれ入まを入んを人の謀多きと孝婦の

若く人不幸の難きまゝぐへ今人のわう屋に織つ
たて姑成るにまゝうそいふく姑に孝と盡せるの十年
あつたに 若く國石に金米賜うなく賞与し給へり

三三 若田所清左の妻

若田所因幡屋清左の妻姑に能事へたり孝あり男女子に
人ありお負しくおるも多くせりしきどもお苦姑
に仕へて礼儀篤くおる賓客の如く仮袖の物下にもあま
をうけあ敬ひたり姑年老く遂に病にふさば食物付は
にむくやううたのふとら疾食ふどもしとくふさ
ば病にき物を咽て食のともまんやうにたる親も自腹と

かりとふりて腰膝をぬぐひ抱添切ありまらるる附本と
賣ふゆゑあまぐらふといふ万の妻れなりいゝあ其子乃
公方大方めは家族多きども姑にさへも孝ふと求め
てさう味く奉る妻のいさかへやうん清左の
賢妻にゑあ家族しきどもくつらもお知ふの多かりし一里の
若く其子いを称しあり安永に年十月八日
云徳し連せし米一石をのふらとあ賞与ありあり

本朝孝子傳卷に終

